

聖書の祈りが私の祈りになる（新約編）

第8章 祈りについてのキリストの教え⑤



模範的な祈りに従う



イエスは、「主よ。ヨハネが弟子たちに教えたように、私たちにも祈りを教えてください」（ルカ 11:1）という弟子たちの求めに応じた教えの中でも、人を赦すことについて語っておられます。今も多くの人が、祈りに対する迅速かつ願ったままの答えを得るための方程式を見つけたいと願い、同じことを尋ねています。しかし、みことばが祈りについて何を語っているかをあまり調べもせず、それを実践するにも十分な時間をかけないとしたら、私たちの願いは誠実なものと言えるのでしょうか。ですから私たちは、かの模範的な祈り、イエスが「だから、こう祈りなさい」（マタイ 6:9）という言葉で始めておられるあの祈りに、じっくりと耳を傾けなければなりません。伝統的に「主の祈り」と呼ばれるものを祈るのは素晴らしいことですが、それよりもっと大切なのは、主が与えてくださった祈りの原則によって私たちの祈りが導かれることです。「こう」という言葉はギリシア語「フートス」の翻訳であり、「このような形ないし様式で」という意味を表していると理解すべきです。「祈る時には、これらの大まかな主題に沿って祈りなさい」---イエスはそう言われていたというわけです。

「天にいます私たちの父よ。御名があがめられますように。御国が来ますように。みこころが天で行われるように地でも行われますように。私たちの日ごとの糧をきょうもお与えください。私たちの負いめをお赦してください。私たちも、私たちに負いめのある人たちを赦しました。私たちを試みに会わせないで、悪からお救いください。」もし人の罪を赦すなら、あなたがたの天の父もあなたがたを赦してください。しかし、人を赦さないなら、あなたがたの父もあなたがたの罪をお赦しになりません（マタイ 6:9-15）

神に「私たちの父よ」（9節）と呼びかけることは、私たちが近づこうとしているお方の深い憐れみを思い起こさせてくれます。私たちは祈るとき、天の父に関心を向けようとします。しかし、愛に満ちた天の父もまた私た

ちに関心を向けてくださるということをご心で意識するならば、そこにはどれほどの祝福がもたらされることでしょうか。神は私たちの父であり、「慈愛の父」(Ⅱコリント 1:3)であり、私たちはその子どもなのです。「父がその子を愛するに、主は、ご自分を恐れる者を愛される」(詩篇 103:13)。神を「天にいます」(9節) 私たちの父として捉えることは、地上のどんなに素晴らしい父親よりも優ったお方であると認識することです。地上に存在する者たちによって捧げられる祈りは、より高い世界におられる、より高い存在へと向けられるものなのです。

「御名があがめられますように」(9節)は、ただの言葉や、祈りの形をとった単なる願望ではありません。これは心からの願いであり、一連の願いの中でも第一のものです。「あなたのお名前[すなわち、ご人格]が、すべての人類の間で聖なるものとして[すなわち、うやうやしく]扱われますように」。この願いは、来るべき御国において神ご自身がすべての民の中で御名をきよいものとしてくださる際に、最終的に答えられることとなります(エゼキエル 36:22-23 参照)。今、私たちがしなければならないことは、神への全面的な畏敬と尊敬の念を示すことにより、憐れみに満ちた天の父に対して抱く親しみとの間でバランスを保つことです。ギリシア語の「ハギアツォー」の意味は、「聖なるものとする」「聖なるものとして扱う」「敬意をもって扱う」「高くたたえる」というものです。人の名前は単なる単語以上のものであり、その人を代表するものです。神の御名は、神ご自身を代表し、表しているのであり、神のご性格、ご性質、お働き、その言葉を含むものです。例えば、イエスの母マリヤは、神の御名を、きよさや素晴らしいみわざと関連づけています。「力ある方が、私に大きなことをしてくださいました。その御名は聖く、……」(ルカ 1:49)。

神の御名を讃えることが、この祈りにある他の願いほど関心が払われていないのは、残念なことです。「私たちの日ごとの糧をきょうもお与えください」や「悪からお救いください」などは、多くの人が真摯に叫んできているのですが、神の御名が高く掲げられ、敬意が払われるようにということについては、自分自身の益についてほどには願われていないのです。神の御名は、どのようにしてあがめることができるのでしょうか。「あなたは、あなたの神、主の御名を、みだりに唱えてはならない」(出エジプト 20:7) という、十戒の第三戒に従わなければならないのは確かです。しかし、私たちは日常の歩みと行いを通して主を敬います。神への従順とたゆまぬ証しこそが、その御名をあがめることとなるのです。「従順な子どもとなり、……さまざまな欲望に従わず、あなたがたを召してくださった聖なる方にならって、あなたがた自身も、あらゆる行いにおいて聖なるものとされなさい」(Ⅰペテロ 1:14-15、またヘブル 12:14 も参照)。

私たちはまた、公同の礼拝に加わることによっても主を高く掲げます。「あなたがたは、……生ける神の都……に来なければなりません。また、……喜びに満ちて集まる無数の天使たち、長子たちの教会……に来なければなりません。あなたがたは神のもとに、……イエスのもとに来なければなりません。それゆえ、……崇敬と畏れをもって神を礼拝しましょう」(ヘブ 12:22-24、28。著者引用の本文より翻訳)。讃美の歌と証しにより、神の御名をあがめ、讃えることになるのです。



次に、「御国」(原文の直訳は、神の王国とは神の権威と支配の及ぶ領域を指します。現在、神の御国は、神に反抗する世界に置かれた教会(すなわちクリスチャンたち)を通じて働いています。しかし、教会は神の国ではありません。そこで、「御国が来ますように」(10節)と祈る時、私たちは歴史上の出来事が遂には完成に至ることを求めて祈るのです。その時、「この世の国は私たちの主およびそのキリストのものとなった」(黙 11:15)のみことばが実現するのです。

クリスチャンの願いとしては、御国の到来以上のものは無いはずですが、ユダヤの伝統の一つによれば、「祈りの中で神の国について触れることのない者は、いっさい何も祈っていないのである」ということです。しかしながら、この言葉を引用しているユダヤ人たちもまた、御国というものを単に自分たちの周りに存在するようなものとしてしか考えていなかったようです。使徒たちでさえ、聖霊のバプテスマを受けるまでは、神の国の本当の性質を理解してはいませんでした(使徒 1:6 参照)。

私たちは、声を出して祈るごとに「御国が来ますように」と言うわけではありません。しかし、御国が完成することへの叫びは、あらゆる願いを捧げるにつけての基盤でなければなりません。神は既にサタンを打ち負かしておられるとはいえ、悪しき反逆者たちの残党は存在します。私たちの最も切なる願いは、もはや魂の敵に支配されることなく、聖霊が心を完全に所有してくださること、そしてあらゆる思い、言葉、行いをイエスに従うものとしてくださることです。「主よ、御国が来ますように。この世界に、そして私の心に」という祈りです。神の究極の願いは、あらゆるクリスチャンがそれぞれに、そして教会が全体として、神の喜びのままに御国をお招きし、その到来に対して自らを意図的に明け渡していくということです。キリストの御国の到来とそのみこころの実現との相関関係は明白です。キリストのみこころがどこでいつ行われるにせよ、その御国は、その所に現されるからです。

神の御国、すなわち、神の支配は、天の支配でもある。なぜなら、その起源は天におられる神にあるからである。神の御国ないし支配に対する願いは、神のみこころに反するすべてにイエスが勝利して治められる、未来の千年紀の支配に限定されるものではない。その願いはまた、神が今、みこころに従うあらゆる心を治められ、その結果、神のみこころが天で常になされるように地でもなされるようになることへの願いを表明するものでもある。これこそが、聖霊における義と平安と喜びを持つ(ローマ 14:17)ための秘訣なのである。

「みこころが……行われますように」(10節)と言うところには完全な服従が要求されます。先に述べたように、イエスは、その使命を全うされるために父なる神のみこころに従われました(へブル 5:7-9 参照)。服従というのはおそらく、祈りにとって最も基本的な要素だろうと思われます。というのも、断固たる服従のあるところ、神が応答なさるに際して障害となるものは何も無いからです。したがって、私たちは「みこころが天で行われるように地でも行われますように」という祈りを、ご自分が何をなさっているかをご存じで約束を守ってくださる誠実な神を信頼し確信する表現としても祈らなければならないのです。

私たちの地上での、かつ一時的な必要の数々よりも高くそびえ立つのは、既に述べたように、天的な願いです。にもかかわらず、私たちは依然としてこの地上に存在し、生きています。地上の必要と関心の数々に囲まれているのであり、私たちの主は、それらのために天の父にお願いをするよう教えてくださっているのです。

「私たちの日ごとの糧をきょうもお与えください」(11節)は、「私たちの地上での基本的な必要をお与えください」という意味です。この願いはそれ自体、神に対する私たちの依存を認識したものです。しかしながら、このように祈るからといって、人間的な努力の必要性が軽減されるわけではありません(創世記3:19、Iテモテ5:8参照)。この願いが認識しているのは、それらの必要のためにどれほど熱心に働いてきたにせよ、私たちの今の必要を満たしてくださるのは神だということです。 私たちが求めて祈る現実的な必要は、それ自体が目的なのではありません。 地上にいる私たちに与えられた目的を成就していくための、手段なのです。 肉体的に養われ、日々の歩みの中で生じる物理的で基本的な必要が満たされることなくして、地上で神のみこころを行なっていくことはできません。日々の歩みに必要とされる数々のものは、この模範的な祈りに見られるすべての願いが実現するために、さらに誠実に労するための力を与えてくれる手段なのです。

「人はパンだけで生きるのではなく、神の口から出る一つ一つのことばによる」(マタイ4:4)。自然のパンのみによって生きることは、人生を、生きる価値のほとんど無いものにしてしまいます。私たちが「私たちの日ごとの糧をきょうもお与えください」と祈る時、そこに「いのちのパン」なる方の意味も込めるべきなのです。 イスラエルの人々は荒野でマナを食べていましたが、それでも死んでいきました。自然の体はやがては死を迎えます。しかし、神はその憐れみの中で、いのちを与える「パン」なる方を与えてくださっているのです。神は私たちを造られるにあたり、物理的な性質と霊的な性質とをもって造られ、その双方にパンを与えてくださっています。 キリストはその霊的な性質に対するパンなのです。キリストは「わたしがいのちのパンです。わたしに来る者は決して飢えることがなく、……」(ヨハネ6:35)と言われました。私たちが日々必要としている霊的なパンをお与えくださいますように---そう願うものです。



「私たちの負いめをお赦しください。私たちも、私たちに負いめのある人たちを赦しました」(6:12)。ルカは「負いめ」という言葉の代わりに「罪」(11:4)という言葉を用いています。私たちの罪は負い目です。 したがって、祈る際には常に、自分が憐れみと赦しをいただく必要のある者であることを意識し、その目的のために神が備えてくださっている方法を用いるようにしなければなりません。 すなわち、罪の告白 (Iヨハネ1:9)です。罪の告白は、高慢な者をへりくだらせ、悔い改めへと導きます。悔い改め、負い目を取り消してくださるように祈るとき、私たちはそれらが神の記録から完全に消し去られるようお願いするのであります。

赦しとは、勝利に満ちた人生にとって必要不可欠なものであり、私たちが第一に、かつ何よりも必要としているものです。 誘惑にどれほど必死に抵抗し、あらゆる宗教的義務を果たそうとしても、私たちは依然、神の義には届かない者です。神の子どもは誰しも、定期的に赦しを求めなければなりません。自分を義とする者には、神の赦しを求める必要は感じられないことでしょう。しかし、救い主、主に近づけば近づくほど、私たちは罪の感

覚、自分が不適格な者であるという感覚を強く感じるものです。イザヤのように私たちも叫び声を上げるのです。「ああ。私は、もうだめだ。私はくちびるの汚れた者で、くちびるの汚れた民の間に住んでいる。しかも万軍の主である王を、この目で見ただから」（イザヤ6. 5）。

「わたしたちも自分に負い目のある人たちを赦しましたように」（12節新共同訳）---私たちは神に赦しを求めます。ここで「ように」という言葉は、程度を表しているではありません。罪を赦せるのは神だけであり、完璧に赦すことなど私たちにはできないからです。そうではなく、私たちは、自分に対してなされる現実の悪事と心に浮かぶ悪事とを赦すことができるのであり、また、赦さなければならないのです。ただし、「私たちも」という言葉には、ある比較が含まれています。私たちが自らの弱さと罪深さの中で人を赦そうと思うのに対し、神はご自身の完全なきよさの中であって赦そうとご思ってくださいます。神に赦しを求めるとことは、他の人々を赦すということと並行して進んでいくものです。私たちは、願った瞬間に赦されますが、それは、取るに足りない自分自身への他者の不注意を赦すことで、赦しというものに対する私たちの理解が行動に移された時に限るのです（マタイ 18:21-35 参照）。

「私たちの負いめをお赦してください」は、過去の罪についての祈りです。「私たちが試みに会わせないで、悪からお救いください」（13節）は、近い将来における守りを求める祈りです。真に悔い改めた人というのは、過去を正すことだけでなく、赦しときよめの後に正しい状態に留まることにも関心を抱きます。人は罪の罰から解放される必要があるだけでなく、罪の力からも自由になる必要があるのです。「試み」とは普通、「悪いことを行う方向に惹かれる」という意味です。しかし、神がその子どもたちに影響を与えて悪い行いをさせる方でない（ヤコブ 1:13）ことは十分にわかっています。難しい点は、「試み」と「会わせる」という言葉の適切な理解にあります。ここで「会わせる」（ギリシア語 *εἰσφέρω*）は、私たちが何らかの環境に導かれることを許すという意味で用いられています。ベンジャミン・ウィルソンの訳では「私たちが試みへと放棄することなかれ」となっています。しかしこのギリシア語には、私たちを見捨てるといった概念はまったく含まれていません。神は決して私たちが裏切ることをお許しなさい。私たちを見捨ててサタンに引き渡すなどということは決してされません。この願いの中で鍵となる言葉は「試み」（ギリシア語 *πειρασμός*）です。聖書における用例を見ると、これは「試み」「試練」という意味と「悪いことを行う方向に惹かれること」という意味を表すことができます。もしも次の「悪からお救いください」が別の願いであるとすれば、その意味は二つのうちどちらでもいいということになります。しかし、もしも、よく言われるように「悪からお救いください」と「私たちが試みに会わせないで」が一つの願いであるならば、悪に惹かれるという意味のほうが適切だということになります。「試み」という言葉に示唆されているのは、サタンの暴力的な襲撃だけではなく、私たちが自分では負いきれないと思うような深刻な苦悩も含まれています。



現代という邪悪な時代、これは誰もが祈るべき祈りです。かの偽りの王は、実に活動的だからです。悪しき思いを吹き込み、悪しき妄想を生み出し、悪しきものを目にするに喜びを覚えるように焚きつけてきます。意志を実行に移すように迫り、情欲を抱かせ、罪を犯させようとし、死へと誘ってきます。私たちの祈りは、自分を破滅に追い込もうとする暗闇の力の前であって、自分の根源的な弱さを真に感じるところから捧げられるべきです。防御的に祈るといふことの必要性は、確かにあるのです。

私たちの主は、祈りをどのように始めるべきかを教えてくださっているだけでなく、どのように終えるかも教えておられます。神への讃美のこの表現は、簡潔な頌栄となっています。これは、祈りが向けられた方に対する敬意であり、この方を認識するものとなっています。讃美のほとばしるこの祈りにあって、魂は、願いは聞いていただけるという確信を得るのです。集団での祈りにおいては、頌栄があれば、会衆全体で声を合わせての締めくくりにふさわしいことでしょう。「国と力と栄え」(マタイ 6:13KJV) はすべて神のものです。これに先立つ願いに答えが与えられるためには、それらをこの意識の中で声にしなければなりません。与えられる答えは神に、そしてただ神だけに栄光を帰するものであるという確信を持ちつつ、それぞれの願いは捧げられるべきなのです。